

2026.9.10 (木)
第10回例会
(通算3867回)

2026-2027 年度 釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン「志を継ぎ、未来を拓く 90 年」

会長 工藤 彦夫
副会長 市橋 多佳丞
幹事 八幡 好洋

例会日 毎週木曜日 12:30 ~ 13:30 夜間例会 18:00
例会場 釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局 釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F

編集責任者 クラブ会報・雑誌・公共イメージ委員会

☎ 0154-24-0860 📠 0154-24-0411

2026-2027 年度
国際ロータリーテーマ

持続可能な
インパクトを
生み出そう

CREATE LASTING IMPACT

2026-2027 年度
RI 会長 オンラインカ・ハキーム・ババロラ

第 2500 地区ガバナー
山本 倫生 (旭川 RC)

「親睦から始まる持続可能な奉仕!」

本日のプログラム 会員卓話「仏教の考え」(プログラム委員会)

次 週 例 会 新入会員歓迎例会 (クラブ研修委員会・親睦活動委員会)

■ロータリーソング：四つのテスト ■ソングリーダー：鬼頭 知彰君

■会員数 108 名

■ビジター

■ゲスト

会長の時間

工藤 彦夫会長



皆さん、こんにちは。この2週間、僕は平和な日々を迎えております。忙しかったのがなくて。今日は会員卓話ということ、この前もそうですけど、なにかちょっと息が抜けて大変平和な日々だなど3人で話しておりました。

今日はつまらない話で。さっき歌った『四つのテスト』なんですけども、クラブによっては四つのテストを歌わないで、唱和をする所もあります。「ひとつ、〇〇〇〇」と言ったら、みんなが唱和するというのもあります。地区大会に行くと例会を担当してホストクラブに従って、四つのテストを歌う場合もあるし、唱和する所もあります。大体調べると四つテストを歌う所と唱和する所は半々だそうです。

あと、国旗があります。国旗と国歌を歌っていますよね。これがいつから始まったかというと昭和8年以降らしいのです。この話も聞いたことあると思いますけども、6年には満州事変で、7年には515事件、そして8年には国際連盟を脱会しています。昭和8年は軍部が台頭してきて、ロータリーはアメリカが発祥の地なので、「ロータリーはアメリカのスパイか」という新聞記事も出たぐらいだったそうです。

その前は当然、国旗も国歌もなかったのですけども、昭和8年に京都ロータリークラブに愛国社の一団が入ってきて、「お前らはアメリカのスパイ。だから解散すれ」ということを言われたらしいのですよ。そのときの代表の人が「いや、ロータリーというのは職業奉仕を通じて国益になることにやっているのだから」と説得をして、「その代わりに何か証拠を見せなさい」ということで、国旗を掲揚して国歌を歌うようになったのが昭和8年。それが全国に広まって国旗を掲げて国歌を歌うようになったそうです。

僕は台湾の普通の例会に2回ぐらい行ったけど、国歌を歌ったのを聞いたことないですね。国旗も上がっていないような気がするのだけでも。今度、来たら聞いてみようかなと思って。他の国もどうかな。きっとと思って地区大会とか周年のときはやるかもわからない。普通の例会ではそういうことをしないと聞いていましたので。

愛国社が京都ロータリークラブに乱入してこなかったら、今の時代は国旗も飾っていなかっただろうし、国歌も歌わなかっただろうということで、今ある常識というのはどこかの歴史の中で流れて、今があるのだということを勉強すると面白くて。

ちょっと時間ですね、来週、また話しますけども。前田和一郎さんという奉仕の理想の歌を作った方がいるのです。この話は次週、to be continued. 杉村君のをいただきました。この話も面白いので、ぜひ来週も来

てください。ということで、紙芝居みたいに「あめ玉」欲しさに来週も来るみたいになりますけども、来週その話をしたいと思います。以上です。

幹事報告 八幡 好洋幹事

幹事報告をさせていただきます。2026年9月のロータリーレートは160円となっております。

また来月、地区大会に25名の参加の申し込みをいただいております。これから移動・宿泊等について皆さんに確認をさせていただきますので、ご連絡を取らせていただきたいと思います。

今月の『ロータリーの友』の記事にあったのですが、**「ロータリーのロゴを正しく使用してください」**ということで、新しいロゴの使用についてのガイドラインが示されておりました。釧路ロータリークラブとしても、新しいロゴの使用を推奨していきたいと思っておりますので、改めて事務局から新しいロゴについてご連絡させていただきたいと思っておりますので、ロゴを使用する際にはご注意くださいと思います。

あと、地区大会のところで、選挙人の選出の依頼が届いております。こちらは、各クラブの会員に依拠して選挙人の選出というのがあります。釧路クラブは4名の選出の依頼がありました。こちらは、工藤会長、市橋副会長、樋口エレクト、そして幹事の八幡の4名で提出をさせていただきたいと思っております。

以上で幹事報告を終わります。

■本日のプログラム■

会員卓話「仏教の考え」

プログラム委員会 佐々木俊和委員長

皆さん、こんにちは。本日、プログラム委員会が今年度2回目。員卓話としては、先週の荒井前会長に続きまして二人目ということで、藤井敬亮さんをお願いしております。

藤井敬亮さんは、皆さんご存知のように、僧侶でありますけれども、この場では特定の宗教、宗派を押すということではなくて、この機会に皆さんの仏教に通じるような考えですとか、常日頃、生活していく中での何かヒントになるような、そういったお話をということで藤井さんをお願いした次第であります。

それでは藤井さん、どうぞよろしくお願いいたします。

藤井 敬亮君

皆さん、こんにちは。ご紹介に与りました大成寺住職、藤井です。時間がありませんね、30分ということです。

最初にお伝えしなければならないことです。今回は

ありがたい話にはなりません。ですから、本当に肩の力を抜いて聞いていただければと思います。

佐々木プログラム委員長からもお話あり

ましたとおり、全般的な概論の概論というような大きい話になろうかとは思っています。

先月、佐々木委員長がお寺へいらっしゃって、どうい内容をお話するかという相談をしたのです。「仏教について話してくれ」ということでした。これ、一般の人々が日本の歴史について話してくれと言われていのと一緒なのです。あまりにも広すぎて、日本の歴史だったら、いろんな時代がありますね古代から中世から近世・近代というふうですね。どの分野のお話をするのか、そして、その内容についても、武士について話すのか、庶民について話すのか、とか。一般の町民について話すのか、交通インフラについてとか、そういう制度について、法律について、そういう歴史というのがあります。

仏教もそうです。これを話してくれと言われても、すごく困るのですよ。ですけども、やっぱりこの仏教の内容というのは、仏教伝来以来、今まで私たちの心の中というか生活の中に染みついているものでもあります。

話が変わるのですけども、この前のビールパーティの後に、工藤会長がお話いただいた中で「RC10カ条」というのがありました。その中のひとつ、これを覚えてらっしゃる方もいるかもしれないのですけども、「良い市民は誠実で、皆から信頼され、自分の属する教会や宗教団体の活動に積極的に参加する」。

これ、西洋の宗教という考え方ですけれども、生活をする上で自分の指針となるような芯があるということが必要とするというのが西洋だと思うのです。

「宗教」と言いますけれども、宗教という言葉自体は明治からの言葉です。それ以前、明治より前は宗教と言えば、この生活全般で教えの中の自分はどうかを信仰しているか。行っているかという意味で、仏道とか儒教であれば儒学とか、陰陽師（おんみょうじ）とか陰陽道（おんみょうどう）というのがあります。神道というのもありますけども、神道というのはその当時、集合仏教で、仏教の中の一派の流れをくむと言われていたので、そういった意味では、この宗教というのは、今の使われ方とはちょっと違った、仏教・キリスト教・イスラム教とか、そういう使われ方ではなかったということです。

日本においては、日常の生活をする中で、「私は仏教の何々をしています」というような、そういった意味合いはなかったのです。



だから、ルールとか道徳とか、そういった規律・規範というのは、元々この宗教の中のものを実行して、その中に生活をしていたわけですから、だからあえて自分がこの宗教の教え「いただきます」とか「ごちそうさま」とか、そういう宗教態度が自然と自分の中に根付いているのが、この日本人であつただろうと思うのです。この体に染み付いている、思わず日本に住んで日本人として、いま「日本らしさ」とか言われていますけども、無意識的にそういった活動が染み付いているということは、これから私が「仏教はこういった考えの下でありますよ」とお伝えしたところで、「もうそんなことわかっているわ」という話にもなりかねないということです。

ですから、皆さんの方が人生は長いですから、言うことではないのですけれども、仏教の考えについてはこれから示していきたいと思います。

仏教というのですけども、仏教は大きく分ければふたつ意味合いがあります。ひとつが仏の教えです。もうひとつは仏になる教え。

仏の教えということで言えば、原理原則、こういった教え・真理ですよというようなことがあります。また仏になる教えとなれば、仏になるためには自分はこういった行動をすればいいか。こういった指針で生活をしていけばいいかとなるのですが、今回は仏の教えというところで収めていきたいと思います。

皆さんも授業の中で、お釈迦様が開いて、こういう教えを残して、というような話はおそらく聞いていると思います。そして、生活する中でもいろいろな仏教用語は度々目に耳にしていると思うのです。

そういうものが日本に深く根付いていることもありますが、日本の歴史を学ぶ上でも、年代とか、その人の名前とか、起こった出来事とかをひとつひとつ覚えてたとしても、その背景にある流れとか、つながりがわからなければ、日本の歴史が本当にわかったとは言えないと思います。

ですから、今回は仏教としての最初の最初、最初の一歩、入口というところをご紹介しますと思います。

この仏教というのはご存知のとおりインドで生まれました。お釈迦様が開かれた教えです。インドの2500年ほど前ですけれども、その当時、バラモン教という宗教がありました。その下でカースト制度という身分差別があつた。つい何十年前前に確かカースト制度がインドでは廃止されたということですが、今として、厳然として階級制度は残っているということです。

このカースト制度は、頂点に「バラモン」という宗教者がいて、その次に「クシャトリヤ」という王族貴族の階層があります。その下に「バイシャ」という商人・町民、一般階級です。その下に「シュードラ」という奴隷階級・隷属階級というのがありました。このよう

な4階層に分かれているのです。

問題なのが、頂点がバラモンです。宗教者です。バラモン教と言います。今、インドはヒンズー教ですけども、バラモン教は古代ヒンズー教という位置づけなのです。ですから、てっぺんが宗教者であるということは、その市政制度が、カースト制度が、宗教観で取りまとめられているということです。政治じゃないのですよ、制度じゃない、ヴェーダ聖典という聖典の中に位置づけられた純然たる宗教的な差別制度になってしまふということ。だから、それから飛び出すいろんな修行者がいたのですけども、それがいずれお釈迦様ということになるのです。

よく仏教を話すときに「輪廻」という言葉もあります。生まれ変わり、死に変わり、前世があつて来世があるという話。これは仏教特有のものじゃなくして、当時のこのバラモン教の時代の一般常識でした。

というのは、そういう階層に分かれて生まれて、自分は何でこういう立場なのだろう、こういう身分なのだろう、というときを考えた上に、生まれたのは誰のせいでもないです。自分のせいでもないんだけど、いま自分はこういう場所にいる。いま自分がこういふことになっているのは何が原因だといったら、そこは前世に求めるのです。前世の自分が何かしらこういふことをしたから、今こうしてここに生まれているのだ。そうなれば、次の来世というのが出てくるのです。今この場でこういう行いをすれば来世はどうなるんだ、いいところに行けるのか。

ここで過去・現在・未来という三世を輪廻するという考え方が当時の常識としてあつたということです。それを踏襲して仏教では輪廻ということも、大前提として話はするわけです。

お釈迦様が生まれたということですが、お釈迦様はクシャトリヤの位、王族貴族、釈迦族の王子として生まれました。幼いころから物思いにふける人だったと言われます。

ある時、お付きの人と一緒に散歩していたら、道端で虫が歩いていて、その虫を見ていると、空から小鳥がバタバタと来た。その小鳥が虫をついばんでパッと飛び立って行ったということです。その飛び立った先で、今度は、さらに大きいタカなどでしょうがそれに食べられたのです。この世は弱肉強食なんだな、強いものが生き残るんだな、そうして命は失われていくということを感じて子供のころのお釈迦様は物思いにふけて悩み込んだということです。

お釈迦様が少し大きくなったころに、お付きの者を連れて、これが有名な四門出遊という話です。

東の門から外に出た。すると、腰が曲がって歩くのもやっとの老人に出くわしたのです。そこでお付きの者に「あの者は何だ」と。「あれは老人です。あなたもいずれああいう姿になりますよ」と言われたのです。

そこでまた、ひとつショックだった。

次に南の門から出て遊びに行ったときに、今度は病気の者を見た。当時のインドというのは 2500 年も前ですら衛生環境も、体の形が変わる感じの病気「ライ」がすごく流行っていたということです。「あの者はなんだ」、「あれは病気になって、ああいうふうに苦しんでつらそうな方ですよ」、「私もなるのか」、「あなたも、そのご縁があれば、そういう病気に罹ることになります」。

今度は西の門から遊びに出た。そうしたら行列に出くわしたということです。「何かを担いで行列している。あれは何だ」と聞いたら、「あれは亡くなった人をこれから火葬場に運ぶ葬儀の列ですよ。人はみんな命がなくなるものです」、「私も、ああなるのか」と聞いたら、「お釈迦様、人はみないずれ死に行くものですよ」。この老病死ということですが、これは、王宮の生活をする周りには触れることのないことなのです。老いて動けない者が王子様と接するわけがない。病気で苦しい者が接するわけがない。死んだ者がいるわけじゃない。だから、見ることに初めてのことだったのです。

最後に北の門から出たときに、すごく清々しい顔をしたオーラというのかな、そういう素晴らしい容姿をした方に出会った。それが聖者と言って修行者だった。そこで「修行者はどういった者か」と言ったら、「この世の苦しみを自分で考えて、なくすように修行をしている者です」というところで、お釈迦様は修行者になるということを、心に決めたわけですよ。

お釈迦様は、それから出家。出世とも言いますが。よくわれわれが使う出世という言葉、バラモンの世界観から抜け出すことを出世と経典では言っています。家を出るから出家というのですけど、家を出て出世をして、出家をして、そして今度は修行の道へと入るわけですよ。

いろんな有名な修行者の所を訪ね歩いて、自分の求めているところの労病死の苦しみを解決する糸口が見つからなかった。じゃ、自分で考えようということで、今度は前正覚山（ウルヴェーラー？）という修行者が集う山ですけども、その山で修行をすることにしました。

その当時の修行というのは、いろんな修行がありました。動物になりきって修行をすとか。びっくり人間大集合みたいなテレビでは、インドの修行者とか言って、面白おかしく紹介されていましたが、そういう修行者がいっぱいいたのです。お釈迦様もあらゆる修行をされて、断食の修行というのもあったようです。骨と皮になって痩せ衰えて。

お釈迦様は 29 歳で出家をして、苦行に入るのですけども、ドロップアウトしたのです。もうやっていられないと。ドロップアウトして、その疲れ果てた体を癒そうと川で沐浴をしていたのです。沐浴をして川から

上がろうとしたときに、力がちょっと足りなかったのか流されそうになった。そこを助けてくれたのが村の娘さんなのです。その村の娘さんに、『乳粥』というものを食べさせてもらって、それで体力を回復しました。

そして今度は、菩提樹という大きい木の下で瞑想に入るのですけれども、その助けた村の娘の名前がスジャータ。皆さんご存知のコーヒーに入れるミルクの名前がここから取られた、スジャータさんといいます。その菩提寺の木の下で瞑想に入られて、これから悟りを得ていくということなのです。ここで大事なのが、お釈迦様はここで苦行を放棄したということです。苦しい行を放棄したということです。体を痛めつけて、そして何かを得ようとしても、正常な考えができないから、体を整えて、体が正常な状態で瞑想することで正しい答えが得られるだろうということで、その菩提樹の下で瞑想されて、12 月の 8 日、明けの明星が輝く時と言われますけれども、突然、悟りを開かれました。というところが悟りを開くまでの大方のあらすじでございます。

この悟りを開いた内容です。やっぱり木の下に座って、そして自分の内面にその理由を落とし込んでいった。老と死というところ、そこはなぜあるのか、それは自分がこの世に生まれてきたからだと、このように生まれてきたということは、今このように存在している。ということは、こういう生活活動をして生きているということです。そういうふうにして、どんどん老死というところが、なぜ起きたのかをどんどん 12 の段階に極められていって、そして最後、無明（むみょう）という精神状態にまでたどり着くのです。

その無明が原因なのであれば、それを取り除けば、その前の段階がなくなり、ひいては老死の苦しみまでもなくなるというような段階を踏んで悟りを開かれた。仏教の大原則というのが、この世は縁でできているということ。そのようにつながり、つながって、理由があって今ここにあるということなのです。だからここで今、「バン」とやると、眠っていた人が起き上がるとか、叩けば音がする、これも全て縁なのです。雨が降るのもそう、雪が降るのも風が吹くのも、皆さんのお腹がすくというのもそう。これ全て何でも、この世のことわりは全てこの縁で成り立っているというのが仏教の大前提なのです。

悟りの内容ですけども、よくいうのが、最初に説いた説法の中で重要なのが、諸行無常、諸法無我、一切皆空、涅槃寂静という言葉があります。

諸行無常というのは全てのものは移り変わるものである。ときとして同じことはないということ。この時間の経過に従って全てのものは移り変わって、そしていずれ終わりを迎えるというのが諸行無常なのです。諸法無我というのは、この世のことわりの中で、我と

いうものはないと。自我の我ですね。我かというものはないということなのですけども、これ梵語ではアートマンと言うのですけれど、漢字に訳されて我となりました。

でも、いま研究者に言わせるとこの諸法無我というのではなくて、本当は諸法非我だと言われています。というのも、この諸行無常、諸法無我というところを僕がよく例えるのが饅頭。ここに饅頭をひとつ置いて、これが明日は饅頭かもしれない。明後日は饅頭かもしれない。だけど1年後にこれは饅頭か。もう多分、形が崩れて饅頭ではなくなっていると思うのです。これは諸行無常であり、諸法無我であり、いつまでも饅頭ではない。これは物に限らず、自分自身も人としても一緒なのです。人というのも、お風呂に入って手をこすれば垢が出てくる。毎日新陳代謝をしている。そして、生まれた時の自分と今の自分と何が一緒かというところ。でも、藤井という存在は今に続いてあるわけです。ですから、この諸行無常であり、諸法無我。あと、鰻のタレの例えもあるのです。「100年ぐらい、継ぎ足しています」というような鰻のタレ。研究者に言わせれば、5年か6年で中身がすっかり変わるらしいですね。それが本当に何百年前と一緒のタレの味なのかといったら、それはちょっと違うということ。それはいいのですけども、諸行無常で諸法無我であるがゆえに、でも、われわれはそれに気づいてないわけです。私たちはいる、ある。私たちは物がある。財産がある。地位がある。そういうことに執着するがゆえに、それを手放すときが来る。それが、つまり一切皆空。この世の全ては苦しみであるという教えなのです。諸行無常、諸法無我、一切皆空。であるけれども、この諸行無常で諸法無我であることを受け入れて、そして自分のものにさせていただくと、涅槃寂靜という悟りの境地に至ることができる、というのが基本なお釈迦様の教えです。この諸行無常、諸法無我、一切皆空、涅槃寂靜という、この四つはどこの宗派にも共通する仏教の教えということになります。

お釈迦様は35歳で悟りを開いて、45年間旅をしながら教えを説いて回りました。お釈迦様も1回、菩提寺の木の下で悟りを開いて修行をしなかったかといえば、そうではない。修行はし続けているのですよ。経典のテキストにはパターンというのがあって、私は誰それに告げた。場所はどこどこで。その他に聞いていたのは誰々で。ということで、またその話というのが続いていくのがパターンなのです。その「どこで解いた」という所において一番多いのが墓場で説いているのです。なんでそこで説いているかと言ったら、昔は丁寧に埋めることはしなかったのですから、死相観といって、その人の朽ちていくその有り様をずっと観察して、その執着、肉体に対する執着・とらわれというのを捨てていく、そういう修行といったものをお釈

迦様は悟り得た後も続けていたということなのです。そういうことをしながら80歳で亡くなられるわけですけども、このお釈迦様の最後の言葉。「物事は全て移り変わるものである。怠けることなく修行をせよ」というこれがお釈迦様の最後の言葉、遺言なのです。全てのものは移り変わるものである。怠けることなく修行をせよと。修行ということなくしては、何かをする、行うということなくしては、この仏教ではありえないのです。修行放棄した時点で、仏教ということにはなりません。

行うということ、自分で勇気を出して一歩前にして行う、そして行うだけじゃなくしてそれを行い続ける。怠けることなく修行をせよということですから、行い続けるということが、これ、仏教では最も大事にしているところだと思います。

佐々木さんがお寺に来て相談したときに、今もそうですけども、「他と違って、お坊さんとして心がけていること、していることがあるのか」ということを仰っていましたけども、私も皆さんも変わりません。私はお寺に生まれて、坊さんとして、今このように育て、坊さんとしてあり続けていようとして続けているからこそ今なのです。

だから皆さんも、お仕事の関係でもそういう努力をして、し続けていたからこそ、今の結果があるのです。ですから、取り立てて、私と皆さまの違いというのはないと思います。

いろいろ話をはしょっているのですけども。これは浄土宗のお坊さんの話です。浄土宗のお坊さんで椎尾弁匡という方がおりました。この方、昭和の鑑真と言われて、何千巻もあるお経の、何ページの何行目に〇〇という言葉が書いてあるというのが全部頭に入っていたということです。昭和45年ぐらいに亡くなっていますけど、その方の脳みそが東京大学に保存されているということです。

その方は釧路にも、うちのお寺にも5回ぐらい来ています。その方が、残された歌があります。それが「ときは今、ところ足元そのことに打ち込む命、永遠のみのち」。ときは今、今ですよ。ところは足元、自分のすべきことです。そのことに打ち込む命、それが永遠のみのち、それが自分の人生となり、永遠と続いていく、その自分としての行い・行状となるのですよということでございます。

仏教の考えとしては、これを行い続ける、これを俗には修行と申しますけども、精進とも申します。自分ができることを行い続ける、精進して頑張る、それが仏教の本当の大きな意味での考えということになると思います。

ですから、親睦から始まる持続可能な方針、奉仕し続けなければなりません。みんなで、このロータリークラブとして地域のために、釧路のために精進していた

だくということが大事なことです。
1分オーバーしました。ごめんなさい。以上でございます。